

# みごと俳人協会賞

## 脳性マヒの花田さん



十二日午後、東京・有楽町の朝日新聞社講堂で開かれた俳人協会主催、朝日新聞社後援の第一回全国俳句大会で、賞を受けた六人のうち、二人の婦人につきそれぞれ、手押し車に乗って俳人協会賞を受けた人の姿が、つめかいた来会者の感動をさそった。

### 精進、宿命を乗越える

### 背負われて素材さがし

東京都港区麻布本村町一四の花田政国さん(三三)、重症の脳性マヒ患者だ。自分一人では食へることも、歩くこともできない。脳性マヒの宿命を乗越えて入賞した花田さんの喜びは、健康な人以上のものだった。

花田さんは、ほかの赤ちゃんが高ハイするころになっても言がすわらず、六つになっても、普通の小学校にははいれなかった。さいわい近々に、身体不自由児のための「光明学園」ができた。九歳で入学した花田さんは成績が抜群だった。

五年生のとき、担任の先生が俳句を教えてくれた。先生に「春兆」という号までもらって、花田さんの俳句精進が始まった。十七歳の時から「さいかち」同人の松野自得氏に師事、二十九歳のとき中村草田男氏主宰の「万緑」同人となり、昭和三十二年には第一回万緑新人賞、ことしは万緑賞をもらった。

こんど入選した句「路(ふさ)の塵(ちり)も、胸も小幡に女寺」は今年の二月、鎌倉の東慶寺、いわゆる、かけこみ寺、でよんだ句。家の中だけにこもっていても、句作の素材が限られてしまつので、お手伝いの中村美子さんに背負われて、月に一度は外に出た。

中村草田男氏は「安寺らしい、やわらかい題がよくて、いい。身体の不自由な春兆君の、弱いの同士がはいりたい」という気持がその底に流れている。いい句だ」とほめていた。

花田さんは、いま身体障害のある人たちのつくりだしているタイプ印刷の雑誌「しのめ」の編集長をしているが、花田さんのような患者は全国で十万人近くいるという。いま一番欲しいものは？ という問いに

「おアシとアシですね」としゃべるとはした花田さん。その泣き笑いの表情の底に、働けないさびしさ、太陽の下で草原の下を走りまわった日の一日もない悲しさがこもっていた。

脳性マヒは脳の運動中枢が侵されて起る病気。毎年千人に一人は、こんな不幸な赤ちゃんが生まれている。せめて重症者を半永久的に保護、收容し、その人なりの喜びを与えてくれる「コロニー」のようなものがあつたら——というのが花田さんの願いだ。

全国俳句大会で水原秋桜子会長(右)から協会賞を受ける母親交代さん、左へ花田政国さん、中村美子さん